

清流

子どもの笑顔が輝き

勢いのある学校

No. 18 (H30. 9. 13発行) 文責 校長 福田雅也

特別支援教育は「特別」でしょうか…？

最近、ますます新聞が読みづらくなってきた自分にがっかりします。

コンタクトを使っていたときは、明らかな老眼だと自覚し、老眼鏡をかけて新聞を読んでいたのですが、眼鏡にしてからは、掛けたままだと読みにくいので、眼鏡を外して目を近づけて読まないといけないという始末です。いずれにしても、コンタクトや老眼鏡、眼鏡の「支援」がないと周りが見にくかったり、字が読めなかったりする状況なのです。もちろん、この状況は加齢による身体の変化によるものです。加齢による身体の変化により、様々な「支援」が必要になる場面は、他にもいろいろあると思います。杖の「支援」がないと歩きにくい方もいらっしゃるでしょう。補聴器の「支援」が必要になる方もいらっしゃるでしょう。もちろん、介護という「支援」が必要になる場合もあるわけです。このように、人は人生を生きる中で、必ずと言っていいくらい、何らかの「支援」を必要とする場面がおとずれるはずですよ。

教育の場面での「支援」はどうでしょう。甲佐町が推進しているICT活用。これも、すべての子どもたちが理解を深めるために、甲佐町のすべての子どもたちに対して行われる「支援」と考えることができます。担任等がわかりやすく教えるためにつくる教材やプリントも、みんなが理解するための「支援」と言うことができるでしょう。

では、特別支援教育をどう考えればいいでしょうか。上に書いたような、教育の中で当然行われている「支援」に、「特別」がついています。

特別支援教育は、すべての子どもたちの様々な実態やニーズに合わせ、個に応じた支援が行われるものです。ですから、特別支援学級では、通常学級の授業より一歩踏み込んだ支援により、丁寧な指導が行われています。そして、特別支援教育は、特別支援学校や特別支援学級だけで行われているわけではありません。すべての学級において、可能な範囲で個に応じた支援が行われています。これらもすべて特別支援教育の視点から行われているのです。

老眼鏡等がないと字が読めなくて困る状況は、私(本人)にしか分かりません。学習場面で、子どもたちが困っている状況も、なかなか回りは気づかないものです。しかし、それらの子どもたちは、一歩踏み込んだ支援により、理解を深めることができるのです。本校の「学び教室」、そしてすべての学級で、そのような温かな授業が展開されています。お聞きになったことがあるかと思いますが、「障がい」は「個性」と捉える考え方が浸透してきています。これらのことから考えると、特別支援教育の「特別」という言葉は、「その子の個性に合わせた、一歩踏み込んだ」教育と言い換えることができるのではないのでしょうか。